

翔てゆく少女

村上 駿

1

「名前はゆきこって言うの。こう書くの」と言つて娘はぼくの左手をとると、その手の平に華奢な指先でゆっくりと搖・季・子とつづつてみせた。

「変わつてるでしょ」「娘はぼくの顔を覗き込み、確認するようになつた。そのとき、笑顔が愛くるしく輝いて、どこか幼さを残したその顔に女性の過渡的な魅力がどつと溢れ出た。年の頃は、まだ十七、八にもいたらぬと思われた。ときおり六月のなまたたかい風が、宵の静けさに誘われるようになつとどこからか迷い出てきてしまふつと娘の頬をそつとやわらかな刷毛が撫でていくようにふうつとどこからかのだつた。すると、娘の生気に満ちた艶のあら長い髪は、急にほつれて風にゆあみするの

1

だつた。

澄みきつた上空には、星が降るようになく
ばめられていて、あらゆるもののがこの上なく
すばらしく、神秘的にさえ思われてくる夜だ
つた。誰でもよい、そんな夜におのれの存在
を感じてみるがよい。とたんに、それはもう
人生の向こう側だ。
こんなふうで、ぼくがゆきこというその女
性と出会ったのは、あたりがもうすっかり初
月も終わりに近い日のことだった。その日、六
夏の香をただよわせはじめいた札幌の、六
ぼくは空路北海道へ入った。旭川に私大が新
集住宅地のテレビ受像機に、どういう訳だか
設されたが、その特別高圧電線が近隣の密
電波障害を誘発するらしい。前日、その私大
からぼくのいる東京の本社に電話が入つてき
た。ＮＨＫと協力して原因を調査した後、し
かるべく対策を講じてくれ、との一方的なも
のだつた。金はいくらくかかってもよい、ただ
しきれぐれも住民感情を害することのない
だつた。

よう に 慎重 を 期し ても らい たい 、 云々 と 、 電話 口 の 相手 は この いっつ の 頃から か 流行 しはじめた『住民感情』といふ わかつた ような わからぬ ような 言葉 を やたら 繰り返し 強調 して きた。千歳で 降りて 札幌までは バスに 摆られ た。車窓から は、昼下がりの 阳ざしが やわら かく 射し込ん できて、ほくは つい うとうとし てしまつた ようだ。隣の客に 凭れかかつて は その 度に 目を 覚ました。

「よく おやすみ になつた ようですな」バス が 着いて、席をたつとき、その客は 笑いなが ちがつた。それが ゆきこ だつた。ようど これから 外出 しよう とする 女性 に すれ まつすぐ 受付へ 向かおうとしたが、入口でち り、その足で すぐ 札幌放送局の門をくぐつた。

「こちらの方ですか？」と ぼくの 方から 声をかけた。

「じゃあ、営業技術課へは、どう 行けばいい

いんですか？」

「それなら二階です。階段を上がって右手の三番目の部屋がそうです。表札がかかつてますからすぐわかると思いますよ。そこにエレベーターがありますけど、階段を使われた方がわかりやすいと思いますわ」

「すみません。どうもありがとう」とそれだけ言い交わすと、ぼくたちは互いの目的に

向かって歩き出した。ゆきこは善良な人が何の勝手もわからない未知の来客にみせる、あの親身な情のこもつた愛想のいい笑みを浮かべてぼくとすれちがつた。そのことに、たいへんの意味はなかつたのだが、おそらくゆきこは誰に対しても同じような態度をとるのだろうが、おそらくゆきこしてうが、そのとき、ぼくはそれだけのこととで自分が、その身が知らず軽くなつていいくのを覚えた。そして自分の身が、そのとき、ぼくはそれだけのこととで自分はじめてあたりにすがすがしい涼気が漲つて

それは、あたりにちょうど黄昏が降りてき
て、街路樹は宵のとばりにその身を沈めよう
とする時刻だつた。あるかなきかの弱い西陽
が、通りに木立の影を長く引き伸ばしていた。
この昼と夜が目に見えて入れ替わる時刻には
ものみなすべてに臨界点でのあの微妙な不均
衡があつた。が、それもつかのまのことで、
やがてすべてが時間の流れに沿つて、休息へ
と向かいつた。そして、一日の仕事で
蓄えられた疲労は静かにその中へと吸い取ら
れていくようだつた。「わかりました。ちよ
う気分になつていきた。「わかりました。ぼくはひどく抽象的な
ど明後日電測車があいていますから、それで
く、データをとつてみないことにまいるしょ
くが訪ねて行つたそのまだ若い係員は、こと
さら専門分野での力量のほどをひけらかすよ
方も対策の打ちようがないことには、お宅の
くが訪ねて行つたそのまだ若い係員は、こと

うに言った。『どうやら、仕事上のイニシアチブは、いつさい奴サンに委ねておいた方が利口なようだ』と、ぼくは思った。玄関を出るとき、入ったときすれちがつた女性の笑顔がちらつと頭の隅を掠めた。

ほくは宿への道をゆっくりと歩いていた。するとそのとき、通りに面した路地を足早に飛び出しきた一人の女性の姿がぼくの目に横断すると、ぼくと同じ側の舗道をぼくに向かう格好で、今度はゆっくりと歩きはじめてきた。彼女は遠くからでもそれとわかるほど明るい目の覚めるようなスカイ・ブルーの帽子をかぶっていた。この色彩的な、やけにこの場にそぐわない印象に、ぼくは奇妙な気分になつた。わけもなく胸が騒いだ。

『何かが起ころべり』すると、ぼくは急に落ち着きをなくしてしまつた。だから、そこにはつた。彼女は遠くからでもそれとわかるほど明るい目の覚めるようなスカイ・ブルーの帽子をかぶっていた。この色彩的な、やけにこの場にそぐわない印象に、ぼくは奇妙な気分になつた。わけもなく胸が騒いだ。

『何かが起ころべり』すると、ぼくは急に落ち着きをなくしてしまつた。だから、そこにはつた。彼女は遠くからでもそれとわかるほど明るい目の覚めるようなスカイ・ブルーの帽子をかぶっていた。この色彩的な、やけにこの場にそぐわない印象に、ぼくは奇妙な気分になつた。わけもなく胸が騒いだ。

を取り出して、立ち止まって火をつけた。それからまた歩きはじめた。彼女は散歩の途中ででもあるらしく、その歩みは目的を持たない人のそれだつた。後ろ手を組み、あたりの雰囲気を楽しむといつた趣でぼくの方に近づいてくる。好奇心が臆病に打ち勝つて、ぼくはすれちがうまで彼女から目を離そうとはしなかつた。彼女の方は、いつかなほくの存在を気に留めるふうがなかつた。ほんの一メートルほどに、彼女とぼくとの距離が縮まつたとき、やつと、それもつかの間のことだつたトルほどに彼女とぼくとの距離が縮まつた。ぼくの視線に彼女のそれが応じたのだった。が、それまでじつと彼女に据えられたままのそれは後年になつても、なおぼくが忘れることができなかつたほど、たしかな瞬間と呼べるものが、できなかつた。ぼくは思わず声が出そうになつて喉元までこみ上げていた言葉・・・

てくれた。

「あら、さきほどのはじまりだつた。今お帰り？」

それがはじまりだつた。

3

娘はちよこんとぼくの横に腰かけている。
今知り合つたばかりだというのに、娘はある
でぼくとはずいぶん前からの知己でもある。
かのようには屈託なく話しかけてくるのだつ
た。警戒心すら持たないようだつた。それは、
裏を返せば、ほくという人間の存在などまる
で意に介していないうでもあつた。それが
またぼくには心地よく思われた。ぼくは久し
く忘れていた、幸運なことともめずらしかつた。
こんなに気が楽なことも言つていい不思議な
気分になりかけた。女性とともにいふうでもあつた。
直言えば、彼女の話すことは、ほとんど脈絡正
にとつては取るに足りぬことをぽくは久し
も取り留めもない俗っぽい話ばかりで、ほん
にとつては取るに足りぬことをぽくは久し
も取り留めもない俗っぽい話ばかりだつた。
直言えば、彼女の話すことは、ほとんど脈絡正

『それなのに、どうしてこうも可愛いのだ』

「と観照するのだった。」

おやつとぼくは思う。話の合間合間に、娘はよく意味のない笑みを浮かべるのだったがほくにはそれがどことなく自嘲的で、憂いすら含んでいるように見えてくる。それともそれは、ぼくがこの異境の地で、この見知らぬ不思議な少女に、そのような内面的イメージを与えたかっただけのことなのかもしれない。

『あつそうそう』とか、『まあ』とかいつた具合に、衝動的な感情がそのままことばとなつて口からこぼれ出たときなど、彼女は特

に素晴らしい表情を、顔や全体に持つていながら、そのようないとき、ぼくは彼女が瞬時完全なまでに意志を喪失しているのではないたが、そのようないとき、ぼくは彼女が瞬時完とさえ思つた。話をしているのではないと定めず、指先をもてあそんでいたが、その黙りこくつて、うつむきがちの眼差しに焦点を

びてくるのだつた。ぼくには、彼女が口には出せないさびしさで包まれていて、今彼女は透明な思考の空白状態にあるのだと思われてくるのだつた。すると、急に彼女がひどく愛おしく思われてきて、以前から、ぼくはこの娘を誰にも知られず、ひそかに愛しつづけていたんだというような途方もない空想に囚われるのだつた。

彼女はぼくを行き付けのレストランに連れていった。その店は大通公園の西はずれの薄暗い路地をほんのわずかだけ入つたところにあつた。通りからはちよつと目につきにくかった。レンガ造りのこぢんまりとした建物の二階がステーキ・レストランになつていて、内部は北欧風の調度と造りで統一された洒落た感じのする店だつた。彼女はよくこの店にくるらしく、入るなりエプロン姿で立ち回つていた店のマダムとおぼしい女性に「こんばんは。あいてる?」と、親しみと馴れ合いの

「あら、ゆきちゃん。今日はまたすてきな

ひととごいっしょじやない。どなた?」

マダムはぼくの方をちらつと見やりながら
彼女に聞いた。

「お仕事のことでちよつとね。東京からみ
えてるの」

ぼくたちは窓寄りの席に陣取った。そこな
ら夜景がよく見えるし、目の遣り場にこまつ
たときや話題に窮したときそいつを利用する
ことができる。昔よくやつた手だつた。しや
べるのにひどく努力が要るようになると、知
らず黙りがちになる。ただその場を取り繕う
ためにだけ外を眺めている。もちろん何も見
てはなんかない。心は余所へ飛んでいる。
もう一刻も早く帰りたいと思つてゐる。だが
そんなことがまともに口に出せる訳はない。
そこでなんとかあたりさわりない口実を考え
出して別れることになる。また電話するよ
はこの相手を嫌つて、愛想よく。もちろんぼく
かなんとか言つて、また会いたい

とさえ思つてゐる。ただ、それもこれも失う
怖さからくるものでしかなかつたが・・・。
ゆきこは過去のどんな女性ともちがつて見
えた。我にもなく心が弾んでいるのがよくわ
かつた。そこでこんなことは口にすべきでは
なかつたと思つたが言つてしまつた。
思わなかつた」「まさかあなたとこんなことになろうとは
しゃつたの?」「あら、あなたがのぞんだんじやなくつて。
ところであなた、あそこへは何しにいらつ
しやつたの?」「あら、あなたがのぞんだんじやなくつて。
と、これからは、自分が札幌へきたいきさつ
要を彼女に語つた。それがいかに困難な仕事の概
であるかといふことをや、自分の能力をかなり
誇張して。しかし割には思つたほどの効
 果はなかつた。

「ふうーん、大変ね」

それだけだつた。彼女は自分のことをあま
り語りたがらなかつた。放送用の原稿を整理

して い る と だ け 教 え て く れ た 。

「わ た し 刑 事 さ ん が 詰 問 す る よ う な 調 子 で
あ れ こ れ と し つ こ く 質 問 さ れ る の 嫌 い な の 。
ま る で 見 合 の 席 で 身 元 調 査 で も さ れ て る み た
い 。 そ ん ん ジ や 、 ち つ と も 小 説 的 部 分 に 触
れ る こ と で き な い も の 。 そ れ に そ ん ん こ と 、
ど つ ち だ つ て い い ジ や な い 」
そ こ で 話 は 、 自 然 と 世 間 日 常 の 俗 話 へ と 落
ち て い く の だ つ た 。
土 曜 の 夜 は ど こ に も 活 気 が 涨 つ て い た 。 街
並 み に も 、 路 上 に も 、 そ こ こ の レ 斯 ト ラ ン
や 喫 茶 店 の テ ー ブ ル の 上 に も そ れ は 乗 り 移 つ
な か つ た 。 平 日 の 朝 夕 、 通 勤 電 車 に 摆 ら れ な
て い た 。 人 々 は そ う 簡 単 に は 家 へ 帰 り そ う も
が ら 、 き ま つ て 誰 も が 見 せ て い る あ の 殺 風 景
な 顔 も さ し ず め 今 夜 は ど こ か へ 置 き 忘 れ て き
た よ う な 案 配 だ つ た 。 ゆ き こ は と 言 え ば 、 相
度 は 十 勝 ワ イ ン の 講 義 を ひ と く さ り 弁 じ は じ
め た 。 そ ん な 彼 女 を 見 て い る と 、 ほ く は 彼 女

が目の前の具象物から、それが自分の中で連鎖的に結びつく知識の一片でもあれば、すぐさまそれを取り出してきては、何の手も装飾も加えず放出するといった印象を抱いた。まるで彼女の底が手に取るよう見えたという氣さえした。燭台に立てられた蠅燭の明かりが彼女の顔立ちに淡い陰影をつけていた。炎がそこはかとなく揺れるたびにぼくは幻惑され、息苦しささえ覚えた。多分ぼくは変な目に嫌な顔をした。そして席をはずした。で彼女を見つめていたのだろう。ゆきこは急にといった。興味ある他人がたつた一人の世界つたものだろ。彼女は足早に化粧室へ入つていた。そらくハンケチでも取り出した彈みにそうなツクの口から文庫本の端がのぞいていた。お椅子の上に無造作に投げ出されたハンドバッフルはこの本を覗き込んでいた。ほくはこの本を取り出していくのか、それを知ることは心の中を覗き込めばほどどの意味がある。エルリヌ詩集だった。ぼくはおもはゆい気

がした。甘く、苦い思いが頭の中を走った。
いつとき、ぼくはこいつに夢中になつていた
のだ。この『無言の恋歌』の一節など譜んじ
ていたほどだ。それも恋人たちに宛てる手紙
の末尾にそれを付け加えるためには。

ああかそけくも爽やけ
風の響きやささやきや！
そは鳥のごとささ鳴きし、
そは虫のごと忍び泣く
そは風渡る小野の草
やさしく叫ぶと似たるかな
君は言うらん、またそれは

石の音なき搖ぎよと。
流るる水の水底の、

かくももだゆる魂は
ねむれるごとき野の果てに

われらがそれにあらざるや？
この静かなる黄昏に、低き声して

わが、はた君が、こころならずや？
つづましき祈りのごとく囁くは

帰つて聞くと、ゆきこは電話をかけていた。
遠くで聞きた彼女に、ぼくはさも軽い感じで訊ねる。

ねる。

「どうこへかけてたの、うち？」

「ううん、お友達のとこ。ねえ、それより。
そうだわ小樽がいいわ。小樽の海岸へ行きま

しようよ。きっとかもめの群が飛んできてる

はずだわ」

そのとき、マダムがぼくたちのテーブルに近づいてきた。

「そうそう、ゆきちゃん、言い忘れてたけ

どね、今度樺山文枝がくるわよ」

「えついつ？それで何演るの？」ゆきこは瞳を輝かせ、身を乗り出した。

「来月の十九日よ。あなたの大好きな『二

一ナ』を演るわよ。丈夫、安心なさい。ち

ゃんと二枚とつてあるわよ」

「でも彼帰るかどうかわからぬいわ。出て

行つてから何の連絡もないわ。出で

ら必ず連絡するつて言つてたんだどうかわからぬいわ。落ち着いた

「うなの、どうせあんたのときけんかで

もしたんじやないの、どうせあんたのことだ

かる。あら、お客さんだわ。ごめんなさいお

じやまして」と最後の言葉だけをぼくに向

けると、マダムは軽く会釈して奥へ消えた。

「さっきの話を聞いていたでしょう」

外へ出ると、ゆきこが聞いた。夜がすつかり更けていた。初夏でも風は冷たかった。街路樹がかさこそと音を立てながら、頭上で身を揺すっていた。それらが醸す数知れないざわめきが妖しげな聲音となつて下り立つてきた。ぼくは肌寒く感じた。それはあまりの寒さに思わず身を固く引き締めなければそれに耐えることができないといふていいのものではなかつた。そういうときには、ほのかな温もりが欲しくなる。それも寄り添う肩先から伝わってくるようになる。その人間的ぬくもりが・・・。

うに、「ああ」とだけ返事した。それにぼくは気のなさそゆきこの問いかけには、ぼくは気のなさそりが欲しくなる。それも寄り添う肩先から伝わつてくるようになる。その人間的ぬくもりが・・・。

容についてはさして興味もないので、話の内には耳を入れた程度に過ぎない。それは声が聞こえてきた。な素振りを匂わせて。それには、ぼくは気のなさそりが欲しくなる。それも寄り添う肩先から伝わつてくるようになる。その人間的ぬくもりが・・・。

から耳に入れた程度に過ぎない。それは声が聞こえてきた。な素振りを匂わせて。それには、ぼくは気のなさそりが欲しくなる。それも寄り添う肩先から伝わつてくるようになる。その人間的ぬくもりが・・・。

していない』といふの言外の意味をこめたつもりだった。その実、身を耳にしていた
のだが。それをゆきこがどう受け取ったかは
わからない。

「少し疲れたわ、かけましようか」と言つてゆきこはぼくを脇のベンチに促した。公園の噴水が一人放物線を描き、それにあらゆる角度からネオン・サインのきらびやかな原色が映えていた。人通りもまばらになつた。こにも都會の孤独があつた。もはや酒と無縁の人間など、この界隈からたつた一人だつて見つけ出すことは困難な仕業にちがいない。

向こうから三人の男が肩を組み合つて、もつれる足を引きずるようにしてやつてくる。彼らの交わす傍若無人な会話が、今はすつかり明かりの落ちたオフィスピルのコンクリートにこだまし、それが一つの嬌声となり夜の静けさの中へ撒き散らされていく。

「ばつかだなあ、おまえは。ほんとにあい

「頭へきたからついがまんできなくなつち
やつてなあ。いつかはやらかすと思つていた
のよ。きつかけだけが問題だつたのさ」
一ありやあ、ああ見えてもプライドだけは
人一倍高いからなあ」「辞めちまいくなるぜ」
「よせよせ、どこへ行つたつて同じことな
んだから」「おい、あのこなかなか可愛いじやんか」
「女は純情そうに見えたつてわかりやしな
いからな」「おい、そんなにじろじろ見てやんなよ。
お楽しみ中なんだから」「さて、おれはもう帰るぜ。せつかくあ
つが股ひらいでおれを待つてるといいうのに」
三人はいっせいに声高らかに「あつはつは
つは」と笑うと、今度は流行歌を一小節ごと
にゆっくりと区切りながら、呂律の回らない
舌で歌いはじめた。歌声はしだいに間遠にな
り、彼らの姿が見えなくなつても尚しばらく

残つていたがやがて聞こえなくなつた。ゆきには両親がなかつた。二人とも脳溢血だつた。父は中風で長いこと床に臥せつた後亡くなり、まもなく母がこれを追うようにして同じ病で仆れた。「いつもけんかばかりしていざかそんな記憶しか残つていないの」と言つた。十歳のとき母の姉の家へ引き取られ、以後その後の家で育つた。伯母さんは息子が一人あつたが、夫には先立たれ保険のセールスをして生計を立てていた。従兄の友達がよく家に入出したりしていた。

しつもまるで自分の家にいるよう振る舞つた。それがゆきこの言う『彼』だった。彼はいくにはその団欒がどんなであつたか理解できただけでそれが花であり、その場を花の匂いに染めていたのにちがいない。「彼つたらい

つもわたしをからかうことしかしなかつた。もちろんわたしも負けじとやり返してばかりいたけど···。従兄も含めて男の人たちがただわたしを見ているだけで、さらにわたしのそばでわたしといっしょにいることに喜びを感じているんだと感じることがわたしのほんとうの幸せの時期だった。わたしは自分に魅力があり、可愛さがあの人たちに喜びを与えていたのだと考えたり、それを意識するようなことはなかつたが、わたしはそれを知つていていたような気もする。わたしはあの人たちの前では何をしても許されてもいるような気がしていた」と、そんなふうなことをゆきこはしゃいていたから、彼との関係について触れた。

「そんなだから、彼との関係について触れた。それから、わたくしたち二人だけはどこかへ出かけるなんてことはたえてなかつたの。彼も誘わなかつたし、わたくしもそんなのはボイフレンドだけであらためたまつたりしちゃわたし。それ

たちだめだつたと思うわ。相変わらず見かけは、彼は従兄の友達であり、ただそのためには彼へ出入りするといふうの関係がずっとつづいたわ。そのうち彼も大学を終えて東京に行くことになり、その最後の公演へというのは彼、演劇部に入つてたの)に来てくれと言つた。帰り道彼とはじめて二人だけで歩くことができたの。彼は今日の芝居の出来はどうだったかとか、あれこれわたしに聞いたりしてとてもにこにこ話しかけながら歩いてたわ。家が近づいて来ると彼、『いよいよお別れだなあ』つてしまひ言つたの。そこでわたし言つたの。いつしょについて行つちやいけないのつて。そしたら彼一瞬とても驚いた様子を見せたわ。でも次の瞬間にはもう質の悪い冗談で人をからかうもんじやないつて笑い流すとするの。冗談なんかじやない、わたし真剣よ！つて彼に食つてかかったの。そのときはじめて彼を睨みつけてやつたわ。そのときはじめてわたしわたくしと目と目でお互いの目の中をわたくしたち真剣な目と目でわたくしを睨んでいた。そいつは、彼は従兄の友達であり、ただそのためには彼へ出入りするといふうの関係がずっとつづいたわ。そのうち彼も大学を終えて東京に行くことになり、その最後の公演へというのは彼、演劇部に入つてたの)に来てくれと言つた。帰り道彼とはじめて二人だけで歩くことができたの。彼は今日の芝居の出来はどうだったかとか、あれこれわたしに聞いたりしてとてもにこにこ話しかけながら歩いてたわ。家が近づいて来ると彼、『いよいよお別れだなあ』つてしまひ言つたの。そこでわたし言つたの。いつしょについて行つちやいけないのつて。そしたら彼一瞬とても驚いた様子を見せたわ。でも次の瞬間にはもう質の悪い冗談で人をからかうもんじやないつて笑い流すとするの。冗談なんかじやない、わたし真剣よ！つて彼に食つてかかったの。そのときはじめて彼を睨みつけてやつたわ。そのときはじめてわたしわたくしと目と目でお互いの目の中をわたくしたち真剣な目と目でわたくしを睨んでいた。

読みとろうとしたみたい。実を言うとわたし
がわたしのことを見たかった。彼がわたしの無分別な決心を子供を諭す
ようになって、わたしの無分別な決心を子供を諭す
いかと恐れていたの。ところが彼がつたら黙り込んじやつて、一言も口を開こうとしないじ
やないの。わたし彼がつぎになんて言うかと
気が感じやなかつた。何かとりとめもないこ
とでも言つてその場の空気を緩和しようにも
それをさせない冷たさがあるの。そんな重苦
しい沈黙だつた。それがわたしの家の路地に
入るまでずっとつづいたの。家はもう目の前
だしわたしたちもうあとがなかつたわ。とう
とう彼が口を切つたの。『じゃあ、元氣で』
つて。わたし何かが崩れ落ちた気がした。
は別れられないわ』そう自分でも訳がわたらし今夜
ず口走つてしまつたの。彼わたしの方は見な
いで地面に向かつてこう言った。『待つてく
れ。一年だけでいい。今はだめなんだ。必ず

きみを迎えるよ。約束する。お願ひだか

らぼくを信じて待つてくれ』って』

どうやらゆきこは泣きはじめたらしかつた。

前屈みになつて、顔を両手でふさいでいる。

いつの間にやらとんだ役目を引き受けいた。

『それ以来ずっと梨のつぶてなの。それが

先週のことだつたかしら、やつと手紙がきた

の。それも無造作な感じで・・・帰るから会

いたい。会つていろいろ話しがしたい・・・

ですつて。わたしに義理立てでもするつもり

のなかしら。手紙だともうとつくに帰つてい

るはずなのにねえ。その場かぎりの興奮でつ

い心にもない愛まで誓つてしまふんだから』

にはならないわね。人間の口約束なんてあて

い心でぼくはゆきこにもこう言いたかつた。

『きみだつておなじようなことが言えるんじ

やないか』と。だがぼくもそれを言わなかつ

た。『実を言うとね、わたしたら今日もさつ

きあなたと会う前にあそこであてもないのに

彼を待つてたの。それでもひよっこり会えるかもしけないってね。でも、もうなんだか馬鹿らしくなつてきちゃつた。これでもわたし疲れちゃつたのよ……」
ほんとに疲れたとでもいうように、ゆきこは深いため息をひとつついた。涙はもう乾いていた。「どうしてそう急ぐんだい。何もたつたそ
れだけでそう性急な結論を出すことはないじやないか。第一それじや彼の方がかわいそ
うだよ。何かの事情つてこともあるだろう」
ゆきこに会わなければいいとのぞんでは、彼がそうは言ったものの正直言えばぼくは彼が
そう思うと明日にもひょっこり彼が現れていった。さうなればゆきことの
仮初めの出会いも費えることになる。
「あなたつて思いやりのある方なのね。わ
たしに聞いてくれるの言うことでも、ほんとうに
真面目に聞いてくれるのね。じやあ、朝の十時にやはりこの場

所でと、いうことに。小樽までなら電車で四十
分もあれば行けるわ。今夜はこれでさよなら
ね」
「あつ、だいじょうぶ。一人でちゃんと帰
れますから送らないでください」
そう言って彼女は立ち上がった。ぼくも立
つた。雨が落ちてきはじめた。
「急ぎましょう」と言つてゆきこは小走り
にかけはじめた。感傷的になり、興奮してい
たぼくは、つい図に乗りました。ああそだ。
ひとつ言い忘れたことがある。・とゆきこ
を呼び止めた。
「なあに」と澄んだ声が夜の中から響き返
した。その距離感がぼくにこんなことを言わ
せた。
「きみは、きっとすばらしい女優になれる
よ」
一語一語はつきり区切つて、ぼくは大きな
声でそう言った。慎ましくかな微笑が、恥じ
らうようにはっきりとした顔に浮かんだよ
うだつた。

「じゃあ明日。また明日。きっとね」
 ゆきこはくるりと踵を返すと、夜の中へ駆け込んで行つた。ぼくは宿への道をゆっくりと引き返した。

宿に着き、部屋に上がるといきなりぼくは着替えもせずに、畳の上に仰向けに身を投げ出した。興奮の余韻がまだ体内を駆け巡つていた。その温もりを感じながら、ぼくはなおしばらくの間じつとしまたま、ぼんやりと目は天井の一点に見据え放心していた。
 ぼくは架空のゆきこを思い浮かべている。
 彼女は今ニーナを演じている。その傍らには彼女の舞台稽古に立ち会つて『かもめ』を演じてしまつた。ぼくは彼女にあれこれとアドバイスを与えていた。ぼくがいる。ぼくは彼女にあれこれと熱心に聞き取り、いちゃほくに了解したという。彼女はぼくの言う一言一言を熱心にしていて、彼女の舞台稽古に立ち会つて『かもめ』を演じたり、注文をつけたりして、彼女はぼくがいる。ぼくは彼女にあれこれとアドバイスを与えていた。ぼくがいる。ぼくは彼女にあれこれと熱心に聞き取り、いちゃほくに了解したといふ

ふうに頷いて見せる。そして彼女はまた新た
な芸に意欲的に取り組むのだった。
階段を昇る人の気配がしたので、ぼくは空
想を断ち切った。お内儀だった。帰りがけに
帳場に立ち寄ったとき、ビールを頼んだこと
もぼくは忘れていた。
「おや、今日は何かいいことでもあつたん
ですか。やけに浮かれているからしゃるじやあ
りませんの」とお内儀はぼくをからかって見
せた。
「おかみさんもひとつグラスを持つてきて
ぼくがついお内儀の調子につられて言つてしま
うと、すぐさま人のいいお内儀は「それじ
やひとつあなたのはんの素敵な口マンス談義でも聞
かせていただきましょうかね」とまるでませ
た小娘さながらのいたずらっぽい笑顔を振り
撒いて、そくさと階下へ降りて行つた。
一杯は結局十杯だった。それもぼくならぬ、「じゃあ、一杯だけ」というお内儀さんの

お内儀のいにしえの口マンスを延々二時間に
も涉つて雄弁に語り聞かせたのち、やつとぼ
くを解放してくれたのだった。お内儀のかつ
ての恋人は特攻隊員だつた。彼は南洋の島か
ら飛び立つて、ついに帰らぬ人となつたのだ
が、お内儀は出撃していく恋人を追いかけて
单身種子島まで最期の別れに赴いたのだった。
そのくせお内儀は言うのだった。
「まつたく近頃の若い娘つたらまるで節度
がないんだから。うちの娘もこんな時間にな
つてもまだ帰らないのよ。わたしたちの若い
時分にはとても考えられないことだわ。こん
な時間にでも帰つてきてごらん。それこそ往
復びんたを食らつたものよ。あらあら、もう
こんな時間だわ。あのこいつたいどこをほつ
つき歩いているのかしらね、電話ひとつ入れ
ないで。これだからしょうがないわねえ、ま
つくりおやすみなさいませ」

ていつた。あたりがしいじんと静かになつた。
再び独りを取り戻すと、ぼくは今日あつたこ
とを振り返りなんでもなかつたようなことに
妙にこだわつてみたり、それを何度も何度も
捏ね回しては反芻するのだった。なぜあのと
き彼女はあんなことを口にしたのだろうかと
か、あのときのぼくの言葉、あれを彼女はどう
う受け止め、どう解放したのだろうか、あの
の内の眞の顕れだったあの表情、あれは彼女の心
とき彼女の見せたあの表情、あれは彼女の心
具合に。
つとぼくは眠りにつけるのだった。
そんな遡巡を何度も繰り返した挙げ句、や
その夜ぼくは脈絡のない、いくつもの断片
的なる夢を見た。その切れ端の一つはこんなも
のだ。ぼくの記憶するかぎりでは、かつて見
たことも会ったこともない男・・・彼はぼく見
向かつてぼくは何やら話しかつたが・・・どうに
やら夢の中でぼくの知人か上司であるらしか
つてばかり年配であるらしい男・・・彼はぼく見
たこととも会ったこともない男・・・彼はぼく見
たこととも会つた。その切れ端の一つはこんなも
のだ。ぼくの記憶するかぎりでは、かつて見
たこととも会つた。その切れ端の一つはこんなも
のだ。ぼくは眠りにつけるのだった。
そんな遡巡を何度も繰り返した挙げ句、や

局のところ気の変わりやすい、気紛れな動物なんですね」と言つたのをよく憶えている。未知の人は瞬間、まるでぼくが何のことを言つているのやら分からぬといつたふうの様子を匂わせた。それは彼の中で、最初は不可解な情念であつたものがしだいにぼくへの不^可信の念に移行していつたらしかつた。やがてぼくは男の視線の中に、ぼくに対するあからさまな非難の色を見てとつた。その目は恰もこう語つているかのようだつた。

『そんなふうに邪推する者は、世界でおまえただひとりだ!』

ぼくはひどく罪悪感を覚えた。が、かと言つて彼の方が正しいと思つた訳でもないのだが・・・。それから先は像が消失した。それともつづいていた。

海は荒れていた。波が生き物のよえに身をうねらせながらぼくたちに押し寄せてきた。波間には点々と大きな岩が頭をのぞかせていたが、その岩肌を打つ波の砕け散る音は、格闘を思わせるほど荒々しかった。波が岩をまるごと呑み込んだかと思うと次の瞬間にはもう突き破られて、ガラスの破片のような白い飛沫が宙を踊つて飛び散つた。空はまるで鉛色の天井に一面を覆われたよう暗かつた。泣き叫ぶかもめの群が、すぐ目の前をまるでぼくたちの存在など意に介する様子もなく大膽に流れていった。羽ばたきを停め、吸い込まれるよう海面へ墜ちていく。それはすごいで再び巧みに羽ばたいて、身を大空へと上昇させていった。

しばらくの間ぼくとゆきこはそんなかもめの舞に見とれていた。

「わたし、笑わないでちょうどいいね。」

「一度でいいから『かもめ』の舞台に立ちたいの。ニーナがわたしの夢なの」

「あんなに悲惨になつてもかい？」

「ええ、悲惨だからこそやつてみたいの。」

最後にニーナが以前の恋人に向かつて、しかしも今は捨てられてしまつた愛人のことをこう言うでしよう。『…………わたし、あの人が好き。前よりもっと愛しているくらい』つて。

わたし、この一言を言うためにはニーナは生きてきたのだと思うの。それがニーナの生きていく証だつたんだと思うわ』

「でも、その一言が以前の恋人を自殺に追いやる引き金になつたんじやないのかい。」つ

まり、銃口はこめかみにあてられていた。ところが彼はそれを引くことができないでいた。といやるが、彼はそれだけを生きてきただと思つたんじやないのかい。つまり、銃口はこめかみにあてられたかったんだと思うわ』

「うう、わたしの子の他りさー」「そうね、わたしのはやっぱり女の子の他

てゆきこはぼくにも来いといふうに手招きしてみせた。それからぼくも仲間に入った。
札幌に着くなりゆきこはそう言ってぼくを誘つた。ぼくは少し躊躇した。
「いや、踊れないんだ」とぼく。
「だいじょうぶ。わたしについて踊つたよ。
うなふりをしていればそれでいいのよ。何も
きまりなんかありやしないんだから」と彼女。
「で、何踊るの?」
「もちろんロツクンロールよ」
彼女の挙げた手に、すぐそこまで來ていた
流しのタクシーが、急ブレーキのけたまし
い音ともにぼくたちの横で止まつた。
「運転手さん、南五条までやつてちよだ
る先に行き先を告げた。運転手は運転手が訊ね
い。近くて悪いけど」と彼女は運転手が訊ね
素振りを見せなかつた。

「構いませんよ、どこでも」

風貌からして、むしろいつもより愛想がい

いのではなかと思えた。

彼女はポイと五百円札を投げ渡した。

「どうも」と運転手は頭を下げながら彼女

に目配せめいた笑みを送った。

八時を少し回っていた。フロアーの上では

すでに幾組かの男女の群が肩をすり寄せて踊

つていた。ぼくとゆきこはカウンターに行つ

て、ウイスキーをストレートで注文した。喉

の餓えを癒すため飲み干す一杯の酒が生き

返るほどにおいしかった。熱いものが喉から

胸元へ下つていく感覚、瞬間かっと燃え上が

り、それからゆっくり拡がっていく体内の火

照り。

ブルースの演奏が急に目まぐるしく散つた。
原色の光線が四方八方へ飛び散つた。
ロールの激しいリズムがそれに合わせるよ
イトの照明が四方向へ飛び散つて、スポット・
ラ
ン

うに場内いっぽいにこだました。

「さあ、今度はわたしたちの出番よ。行つて踊りまよー」

彼女はぼくの腕をとりフロアへ引っ張つていった。群が殺到して入り乱れた。もうぼくなどお構いなしだつた。彼女は踊りまくつた。つられてぼくも踊つた。わけもなく、こく地よいことに思われだした。衝動的だつたらだ。意識がすうつと上方へ解放されていくようだつた。ときどき彼女の方をちらつと見遣る。ぼくの視線を拾うと彼女はただ笑つて頷き返す。ぼく自身が宙に浮きだした。ぼくは何も思わない、語らない。ただ訳もなくぼくたちは笑つていた。するとそれが連鎖してまた次の笑いが無性にこみあげてくるのだ。ぼくはお互いかと疑つた。彼女は白い歯を輝かせてぼくを誘う。なぜかやけになつてゐるのではな

笑つてなんかいな。くちやくちやになつて
いる。地響きを立てて大地が振動している。
ぼくはもうくたくただ。頭の芯が痺痺したよ
うだ。彼女は顔中汗で光らせている。ゆきこ
は顔にまといついた髪を勢いよく搔き上げた。
「さあ、少し休みましょう」
「あなた、なせ結婚しないの？」
「やめよう、今はそんな話しさ。機会に恵
まれなかつただけのことさ」
「嘘おつしやい。じやあチャンスさえあれ
ましてたと言うの？」
「そうだね、そさせざるを得なかつたかも
しれないね。そりや理想はしないことだと
思うけどね」
「それじやあ、まるで彼といつしょじやな
つけ。子供をつくるのが怖いって」
「ああ、ゆうべ話した彼のことか」
「えつ？」
「い」

わず、乞われるがままに応じていた。バーテンと何くれとなく話していたが、女が何気なくこう呟くのが耳に入ったとき、思わずぼくは身震いした。・・・人間て、いつたい何のため生きているのかしらね・・・。渋谷から東横線で毎日毎日同じ景色を眺めながら通勤していたとき、そいつはぼくを襲つた。さびしい暮れ方だった。いつになく乗客も少なかつた。立つて吊革に掴まつている人間は数えるくらいだつた。人いきれに不快な思いをせず帰ることのできる数少ない日のひとつだつた。ぼくはいつも空いているときそうするよう、自動ドアの窓ガラスに凭れて流れる家並みや暮れなずむ遠景を見送つれていった。電車は高架を走るので、いやでもぼくの視界は拡がる。やがてすべての風景が茫漠とした気配に包まれた。そのとき、ぼくはみんなとこころで何をしていいるんだろう。そしてそんないう不条理な観念に取り留めもなく・・・俺はいったい今こ

· · · されは周りのあらゆる人間にも及んでいた。
· · · きみたちはこんなところで一人ぽつね
んとただ黙り込んで腰掛けついつたい何をし
てるんだ。何もこの俺が今ここでこうしてい
なればならぬという理由はどこにもない。
なんなら俺は今すぐ電車から飛び降りること
もできるし、次の駅で降りてどこか知らないこと
ところへでもふらつと蒸発することだつてで
などどこにもありはしないじやないか・・・
きる。何々をし、何々をしないという必然性
しかし、ぼくは電車から飛び降りもしなけ
れば、蒸発することもなく、やはりいつもの
日と変わることなく、同じ駅で降りて同じ道
を歩いて同じ家に帰った。しかし、やはりいつもの
で何かが起きたことに変わりなかつた。おまけに、
忘れかけていたそいつとまた肚突き合わせ
る羽目になつた。それも行き場をなくした女
の仕方なしの一言で。

浮気な女だなんて思ってないわ。でも、ああいう女の見えたら、わたし自分がわからなくなつてきちゃつた。そりやわたし・・・ねえかしけなくつてよ。でも、わたし自分がわからなかつてちようだい。ほんとうにわたしそんなに多情な女なんかじやなくつてよ。ねえ、わかつてたらわかつてくれるでしょう。ただわあなたならわかつてくれるでしょう。ただわたし、あの人のよう深深く思いつめれなさいのよ。根がお天氣屋なの、それに氣紛れ・・・。たしかに、あの人のよう深深く思いつめられなさいのよ。自分でよくわかつていれるつもりよ。ほんとうは楽しい気分にしてもらえて、浮かれているときが一番なの。わたしつつていつもいい気分でいたいの」「わかるよ。とてもよくわかるよ。だからゆきこそんな顔するなよ。人が変に思うじゃや。だからいろいろなものに目移りがして色気を出すようないか、急におかしくなつたりしちゃ。きみはいろんなものに目を愛するなよ。人が変に思うじゃや。だからいろいろなものに目を愛するなよ。人が変に思うじゃや。きみはもうと自分を大切に扱うべきだよ。きみつていう人は、自分を大切な女じゃないよ。むしろきみはもつと自分を

の前の新奇なものにはあまりにも無防備に自分を投げ出しそぎてしまうんだから。それに比べぼくの方はまったく逆に臆病で、多情とみはぼくに下心があるなんてことは思つてもみたこともないだろうけど···。さあ、もきみがいうならぼくなどはもつとそうさ。きんだー

う一汗流そうか。ぼくは今夜踊つて踊つて、そして疲れて疲れて疲れまくつてしまいたい

んだからぼくたちはまた踊り狂う雜踏の中へと紛れ込んでいった。ぼくは朝までゆきこそれからぼくたちはまた踊り狂う雜踏の中

と二人踊り明かそうと思つた。なぜなら、さつきぼくは踊つていたとき、熱気の中で何度か隣の見知らぬ女の濡れた肌に触れたのだつた。その触覚、そのときぼくは昼間小樽の浜でゆきこに覚えたのと同じあの熱いものを体の底に痛いほど感じた。ぼくは自分がゆきこの何を求めているのかを知つた。

の舗道からは、朝靄が立ちのぼつていてあた
りはしんと静まり返っていた。人気はなく、
街全体がまだ深い眠りの底に沈んでいた。ぼ
くとゆきこは車道の真ん中で手をつなぎ、合
わせた手をそのまま大きく振りながら歩いた。
ちようど病み上がりの人間が、雨上がりのす
がすがしい朝に散歩に下り立ち、久しぶりに
踏みしめる大地に感じる命の証にも似たもの
があつた。

「わたし、前からこうして誰もいない車
道を誰かと大手を振つて歩いてみたかったの。
なびっくりしてしまってしようね、朝まで踊
つて飲んでたなんて聞いたら・・・」

とてもいい気持ちだわ。友達が聞いたらみん
道を誰かと大手を振つて歩いてみたかったの。
なびっくりしてしまってしようね、朝まで踊
つて飲んでたなんて聞いたら・・・」

「ううん、ぜんぜん。あなたの方は？」

「同じく、ちつとも」「さみながら朝靄の中をどこまでも歩いて行つ
ぼくたちは彼女の好きな流行歌を軽く口づ
た。
。

それからのことばは長々と語る必要がない。

7

「今日はこれからどうするの？」とぼくは彼女に訊いた。
「これから一度家に帰つてまたすぐ局へ出るわ。あなたは？」
「ぼくもこれから一仕事しなくちやならない。技術の人と旭川まで行くんだ。まつ、車の中でしつかり眠らせてもらうよ」
「がんばりましようね、おたがい。あつ、タクシーがきたわ。悪いけどわたし先に失礼させてもらうわ」
「今度はいつ逢える？」
「そうね・・・局の方へでもいらしてちょうだい」
「さよなら、気をつけて」とぼくが言うと、彼女は動き出した車の窓越しに笑顔の顔をくつつけながら手を振つた。

なぜなら明くる日彼女はもう局を辞めないと
し、またぼくの仕事の方もさして手こずると
いうほどのこともなく終わりそうだった。高
圧碍子がリークしていた。これは、ぼくの会
社が開発した専用レンズで覗けばすぐわかる。
送電線が電波を遮蔽している要因もあつたが
こちらはアンテナ位置の調整で解決するだろ
う。あとは業者に任せおけばよい。さしづ
めコンサルタントであるぼくの会社の仕事は
終わつたことになる。あとは提出する報告書
の整理ぐらいのことだ。

ぼくはいっしょに仕事をして仲良くなりか
けた局員にゆきこのことを思い切って訊ねて
みた。

「それは多分アルバイトの子じやないかと
思いますね。短期契約でたくさん雇つていま
すから。ちよつと待つてたくさん雇つていま
る簿があるはずだから見て下さいよ。たしか
に名簿を片手に帰つて

「総務課のやつちよいと変な顔してましたよ。この中から搜してみてください」と言つてぼくに名簿を手渡した。指で丹念に追つた。ぼくはその中から揺・季・子という文字をすなあ。(とつさにぼくは顔が赤くなつてい)くのを自分でも感じていた(あつはつはつは)になつたらまた持つてきて下さい」じやあわたしはあちらにいますから、ごらん(ぼくは名簿に載つていて彼女の住所を頼りに家の近くにまで行つてみた。多分ここだ)ろうと思われる家の前まで立ちながら中へ入る勇気は出なかつた。ぼくは宿の殺風景な部屋で一人ぽつねんと何もしないでいることのほかすることがなくなつた。ぼくはたまらなく苛々とし出した。毎日夕方になると決まつて歩いた。すべてが色つた例の通りをほつつき歩いた。ぼくは彼女と出会った。

褪せて映つた。あの日あれほど甘美な感傷を湛えた外界すら今は忌まわしいものに思えてきた。多分会えまいと自分に言い聞かせながら、それでも心の底では淡い希望を抱いていたぼくは、同じところを何度も何度も行ったり来たりした挙げ句、歩き疲れてしまい、期待がまたしても徒労に終始したことを見知らされる羽目になつた。

『やはりもとのままの自分に逆戻りだ。いつも結果は決まってこうなのだ』そんなことを

した。そうして諦観的な気分に浸つてしまふを一人ごちながら、ぼくは宿への道を引き返した。ぼくの気持ちは満たされないことに却つて慰めを覚えると、逆に外界さえそれに呼応してぼくをやさしく包み込んでいくようと思えてくるのだつた。が、満たされないことがようになつた。

夜、彼女と行つたレストランで一人食事をしてみた。そこにゆきこがいるはずはなかつた。マダムに彼女が最近来ないかと訊ねてみ

た。客の応対に忙しいのか、それとも、マダムにしてみれば、恐らくままごとほどにしか映らない他人の情事などいつこう関心がないのか、彼女は突つ慳貪にこう言った。

「あの子はよくいろんな男の人と出歩くのよ。あの子にはそれだけのことでも、そちらへんの意味を男の人たちは変に誤解するのね。

あの子にそんな気はないものだから、いつも
ごたごたしたもめ事ばかりこしらえてはわた
しのところへ持つてくるのよ。あの子のする
ことに深い意味はないのよ。あの子に恋愛な
んかわかるはずもないわ。あなたもあの子な
んかに深入りしない方がよろしいんじやなく
て。あなたは内地の方なのだしこれ帰る
んでしよう。どうせあなたも遠くへ来て、気
晴らしのつもりであの子のお相手を勤めたの
でしようけど···。そうね、まったくあの
子は遊ぶには都合のいい娘だものね。男好き
のする顔もあるし···。あら、わたし
たらよけいなおしゃべりまでしてしまったよ

わたし正直に言つてあげておいた方が却つ
ていいと思つたから言つたまでですか
マダムは客の方へ水の入つたトレイを運ん
で行つた。ぼくが食事もせず店を出ようとす
ると、遠くから彼女は・・・あの子は最近ず
つとここへは来ませんわ・・・と、他の客に
も聞き取れるくらい大きな声でそう言つた。
それから何か急に思いついたとでもいつたよ
うにぼくのところまで駆け寄ると・・・それ
に、あの子はもうこの札幌にはいないかもし
れませんわ・・・と、囁くよう付け加えた。
マダムの言葉で、ぼくは彼女の中でどんな
存在だったのか、との想念が鎌首を擡げ、ぼ
くを悩ましつづけた。ぼくもまたマダムの言
うようには他男たち同様彼女の中で十把一絡
げにされると、ぼくは彼女の中でどんな
がみんな嘘のはずはずはない。仮にあれらの
れども彼女は誠りありといやい

実なのだ。

そこでぼくはこの疑念を封じ込めてしまふためには、こんなふうに転化する。だが、どうして俺はこうも愚劣なのか。彼女とのことが真実であつたことは、この俺が一番よく承知している。だのに、事態が少々変化し、時間の中で記憶が薄れてしまい、そこへ持つてき偽としてこうもたやすく葬り去ることができてるとは。ぼくは昨夜寝床の中で読んでいた『バルムの僧院』の次の一説をまるで縋り付くような思いで反芻していた。『おれ自身にたいしてしたときより、今日のほうがもっと賢いと、なんという失敬な態度だ！おれがこの決心をどうして考えたりできるのか？』

う日になつてしまつた。ぼくはまた例の通りに出かけた。ちょうどいいよい明日は帰らなければならぬといふで

彼の帰るのを待っていたのかもしれないと考えていた。陽が翳つてきた。退け時だつたので通りは車で溢れるほどだつた。クラクシヨンの止み間がなかつた。空気はそれらの上げる排煙に領され、頭上にはそれを吹き払うそよとの風もなかつた。先日ゆきこが現れたと同じ路地を二つの影が飛び出した。連れの一人がゆきこであることを確認するのにそう手間取らなかつた。瞬間、心臓が止まつたかと思つたほど胸が締め付けられた。足が金縛りにあい、ぼくはしばらくその場を動けなかつた。次に事態を悟ると、逆にぼくの心はひるんでしまつて、この場から逃げ出してしまいたくなつた。あれほどあてのない希望を抱いた。前にしても喜びは込み上げなかつた。こさず引き返し、ゆきこを目にして搜しあぐねていたといふのに、ゆきこを目にした。惨めさを覚え、またそれは卑怯なことにひどくの邂逅を秘めたまま別れていくことのようにも思えた。

彼らはぼくの方へは足を向けずに反対側へと折れた。ゆきこはぼくから離れていこうとしていた。ぼくは足早に彼らを追いついた。途中からは駆け出した。やつと追いついた。彼らはぼくの前五メートルほどのところで信号を待っていた。この信号が赤から青に変わり、彼らはまた歩き出そうとするところだつた。このタイミングを捉えてぼくはゆきこの後ろ姿目がけ、今またぐ偶然に見かけたのだと、いうふうに声をかけた。

「北村さんじやないか！」

声にゆきこが振り向いた。一瞬彼女は驚いた。この狼狽してしまったようには見えないが、どうに声をかけた。

「北村さんじやないか！」

女性のことを北村と、ぼくが知り得ないはずの声に、ゆきこが振り向いた。一瞬彼女は驚いて狼狽してしまつたようには見えないが、どうに声をかけた。

ぼくに驚いたのかそれにはわからぬ。ぼくも單に姓で呼んだことに驚いたのか、それとも単にぼくに驚いたのかそれにはわからぬ。ぼくも单にもう自分を演じることに驚いたのかそれにはわからぬ。ぼくも单に

とゆきこのほんの僅かな空間が、気まずい中、そのとき、ぼくの表情はぎこちない不自然なものに見えた。すると、そのとき、ぼくの表情はぎこちない不自然なものに見えた。

にも、一週間ほど前の出会いの日のようく短

く緊張した。

彼女は連れの男に何やら二言、三言言い置くと、ぼくの方へ走り寄ってきた。

「あの日別れてから彼が突然家へきたの。どうにもならない事情があつて遅れたらしいの。やつぱりあの人はあなたの言うように約束をたがえるような人じやなかつたわ。それでわたくしだちよく話し合つたの。二人とも泣いたわ。わたしたち結婚することにしたの。これから二人で東京に行つて、いっしょにお

芝居の勉強しながら働くことにしたの。あなたとのことは、わたしどんな些細なことでも一生忘れないわ。ほんとうよー

彼女はまばたきもせずにじつとぼくの目を見ていた。その数秒間がぼくには無限に長く感じられた。「じゃこれでね。彼待つてるから。また東京で会えるかも知れないと、彼女はまばたきもせずにじつとぼくの目を見ていた。その数秒間がぼくには無限に長く一生忘れないわ。ほんとうよーたとのことは、わたしどんな些細なことでも芝居の勉強しながら働くことにしたの。あなたとのことは、わたしどんな些細なことでも一生忘れないわ。ほんとうよー

ゆきこは怪訝そうにこちらを窺つていてる男

のもとへ小走りに駆けて行つた。ぼくにはと

うとう一言もしやべらせずに・・・。男にゆきこは何やら言つたようだつた。男

は、ぼくの方を見遣ると軽く会釈した。律儀な、明るい目許の青年だつた。

西の空が火事と見紛うほど赤く燃え上がつた。そいつが過ぎるとあたりは夕闇だ。

8

夜汽車は遠くまばらな家明かりを闇に流して行く。明日の朝まだき函館に着き、それから青森まで連絡船に乗り、青森から上野行の

『はつかり四号』に乗る。そうすれば夜までには中野のアパートに帰れる。そこから長万部から行商風のおばさんが乗り込んできてぼくの隣に腰を下ろした。室蘭からの帰りだと言つた。冷凍みかんを取り出して、すすめなさるか。仕事くにも食べろと言つてすすめられた。それから訊くがはじまつた。どこへ行きなさるか。仕事

は何をしてるか。年は？結婚はしてるか？郷里はどこか？等々。年は？結婚はしてるか？郷
明で納得すると、今度は自分のことを、いつ
もおばさんの胸の中に引っかかるつていると思
われることを語りはじめた。
「いや、わたしにもちよどあんたくらいの息子がいたんだけどねえ。人間の運命つてわか
らぬものだねえ。もう死んじまつたけ
ど、そりやほんともうあつけなかつたよ。」
おばさんは急にしんみりと話しあじめるの
ので、一応驚きと同情のふうを装つた。おば
さんはつづけた。
「それが、亡くなる日の朝、あれがわたし
に電話をかけてよこしたんだよ。ついぞ手紙
はおろか電話だってかけたんだよ。あれがわたし
の子だのにね。それが急に朝電話をかけてくれたことのない
すもの。こりやてつくり何かあつたなつて思
つて急き込んだのも無理ないさね。ところが
あの子ときたら何か事件があつたといふわけ

じやいつたいぜんたい何だつてまた電話なん
でもないし、これといつた用事もないんだね。
かする気になつたんだつてわたしが訊くと、
いや、何、ちよつとかあさんの声が聞きたく
なつただけさんなんて笑い飛ばす始末さ。変な
子だよ、まつたくおまえは・・・なんて言つ
て、おたがい笑つて電話を切つたんだよ。じ
やあ、かあさん元氣でね。おまえもだよつて
わわたしが言つて、それが最期だつたよ。わた
しゃ、今でもあれの言葉が耳元にこびりつい
て離れないんだよ。それから一時間もたたな
いうちにあるのは死んじまつたんだよ。オー
トバイに乗つてダンプに衝突しちまつたんだよ。オー
即死だつたそだよ。わたしや不思議でなら
にわたしに電話する気なんか起こしたんだろ
うかつてね。あれがあの子の運命だつたんだ
に電話したばっかりに死んだような氣さえす
るよ。それでも五分くらいは話したのかね。
てわたしにやとても信じられないような氣さえす
に電話したばっかりに死んだような氣さえす
るよ。それでも五分くらいは話したのかね。

電話さえしなかつたら、それともわたしがどこかに出かけてでもいれば、あの子も五分は早く出勤してたにちがいないさね。あの子、言つたもの。じゃあ、かあさん、これで切るよな。もう時間がないんだ！遅刻しちまうよつて。それで、きっと急いだんだとと思うね、あの子は・・・」
そこまで言い終わると、おばさんはふうつはずつと黙り込んでめつたに話しかけてこな
と一つ、肩で大きく溜息をついた。それからくなつた。
た。就職で郷里の駅をあとにするとき、友達がたくさん見送りに出てくれた。あれは十八の春だつ
が友達の一人一人と握手していく光景を見つ
めていた。やがて列車が動き出し、友人たち
のあげる万歳という大きな声が夜のホームに
響き渡る。最期にぼくの目は母を探している。

列車が速度を増すのと同じほど速く、母の顔
が笑顔からみるみる涙顔に変わつていくのが
見えた。こらえようとする母の顔がゆがんで
見えた。

長いこと母にも会つていなかつた。ぼくだ
つて手紙はおろか、電話だつてかけたことが
なかつた。東京へ着いたら手紙でも書こうか
とも思つたが、ぼくの隣で、今は心地よさそ
うに眠つてゐるおばさんを見てやめることに
した。書いておきたいことは山ほどあるよう
な気がしたが、結局のところそれは、母を説
のわからぬことで困らすことにはしかならな
かつた。

いた。
「札幌でいつたい何があつたんだ」
「いえ、何もありはしません」
「じゃあいつたい何があつたんだ」
その晩、ぼくは会社を辞める決意を固めて

急に辞めたいなんて。うちの会社がいやにな

つたのかね？」

「いえ、そういうわけじゃありません」

かべながら・・・。そんな社長とのやりとりを頭の中に思い浮

（了）

（註）作中の引用文は次によりました。
チエールヌ・堀内大学訳「無言の恋歌」
スタンダーホフ・神西清訳「かもめ」
タル・生島遼一訳「バルムの僧院」